



中嶋嶺雄

人生には思いがけないことがあるものだ。世界一の音響を誇るというサントリー・ホールで、しかもそのオープニングの十月十二日当日に、二千名もの聴衆をまなこに独奏しようとは夢にも思わなかった。

その日の夜の「ザ・ガラ」第二部「音楽との対話」のゲストとして

私は東京交響楽団メンバーの伴奏でバッハのチェロ組曲第三番を弦楽四重奏に編曲した「ブルー」を弾いた。

やはり緊張していたらしい。普段はそんなことが絶対にならない部分で音程が狂ってしまった。演奏後に「モーツァルトにもミュージカル・ジョークという曲(K.522)があるんです」と言うつもりが、

そんなことを語る余裕もなく、また「アンコール」の声がかかったことも聞きとれなかった。

かつて文化大革命さなかの上海では紅衛兵女子のピアノ伴奏で毛沢東讃歌「東方紅」を即興で弾いた体験をもつ私ではあるが、今回の出演は私の人生のハイライトであったのかもしれない。

そのうえ今回のことが早速 伝

わって、この十二月七日には鈴木鎮一先生門下の松本音楽院第一期生として、今度はエクレストのソナタ(ト短調)を再びサントリー・ホールで合奏することになった。

酒の飲めない私が数年前には拙著「北京列烈」でサントリー学差賞をいただいたし、佐治敬三氏には大いに感謝せねばなるまい。

(撮影 藤森秀郎)

中嶋嶺雄教授、サントリー・ホールで独奏の快挙